春野町写真集 ～ 集落・伝説・学校 編 ～

＜作者まえがき＞

　春野町は、大きく**気田（けた）、犬居（いぬい）、熊切（くまきり）、杉・川上（すぎ・かわかみ）**地区に分かれています。これらの地区の中にさらに複数の集落が含まれており、集落ごとに環境や文化、暮らしぶりが異なります。

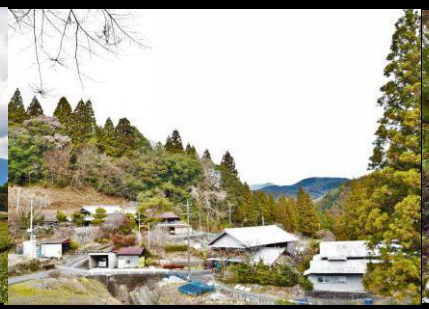
　これらの集落の中には住民が数えるほどしかいないところもあれば、すでに人が住まなくなってしまったところもあります。

　こういった集落の写真や地域ごとの言い伝え、閉校していった小中学校の情報などを保存し、春野町の今の記録を次世代につなげることを目的として、今回、この写真集を作成しました。

　いつか春野町出身の方がこの写真集を目にした時に、かつての地元の暮らしを懐かしんでいただけたら嬉しいです。

※　全ての集落を網羅しているわけではありません。また徐々に追加していきたいと考えています。
※　小中学校の情報は、「磐周地区小・中学校　旧校歌」（平成23年：鵜飼 和吉）を参考にしています。
※　春野町の伝説は、「ふるさと春野の伝説」（昭和60年：春野町教育委員会）を引用しています。

2021年２月　山里いきいき応援隊　水窪地域担当（春野町出身）　栗島　洸



春野町写真集

～集落・伝説・学校～

長蔵寺（ちょうぞうじ）

長蔵寺（ちょうぞうじ）

長蔵寺の伝説「親なぎ洞」

親投洞（おやなぎどう）

熊切の県道の長蔵寺（ちょうぞうじ）をぬけて、石打松下（いしうちまつした）に登る急な坂道にかかろうとする所に高い橋がありますね。その下を見ると、熊切川が清く流れています。それから少し下に親投洞（おやなぎどう）と呼ばれているふちがありました。昔は今のようなりっぱな道があったわけではなく、さびしい森になっていたそうです。

昔、たちの悪いむすこがいて、親たちがいては食糧もたくさんいるし、自分も自由にならないので、親を捨てればよいと思いこみ、親の悲しむのもかまわず、こもでぐるぐるまいて、人目を忍んで今の親投洞に捨てたのです。捨てられた親のうめき声が深い谷間を伝わって、悲しく消えていきました。

それからすこしたって後、村里の若者の間にうわさが立ち、ちょうどそのころは、食糧も不足していた時代なので、いつ年老いた親たちは、次々とこの親投洞に捨てられていったそうです。

それ以来、このふちは、親投洞といわれるようになりました。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

石打松下（いしうちまつした）

石打松下の伝説「へびぶち」

へびぶち

新宮の池からにげてきた大じゃ（※）は、塩がほしくなりました。そこで、美しい女の人にばけ、いもの葉を持ち、下出さんという人の家に立ちました。

「どうか、この葉に、塩を入れてください。」とやさしい声でたのみました。

塩をもらうと、じゃ体（へびの体）をあらわし、海の波のようなうなり声をたてて、前の川に入っていきました。

それで、このふちを、へびぶちと言っているのです。

※　和泉平の伝説「新宮池の大じゃ②」をご参照ください。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

田黒（たぐろ）

筏戸大上（いかんどおおかみ）

筏戸大上の伝説「日暮しの松」

日暮しの松

天野美濃守（あまのみのかみ）がはぎの城主であったころは、とても食べ物に困っておりました。村人たちは山を切りひらいて、やぶ焼きをし、山作りをし、とったものを食糧にしていました。

ある日のこと、美濃守（みのかみ）に仕えている刀かじの大上伝衛門（おおかみでんえもん）の下女が、山の畑に昼飯を持っていこうとして、飯びつを背負って、道を急いでおりました。

ところが、途中で大きな熊があらわれました。慌てて逃げようとしましたが、とても逃げきれず、一本の松の木によじ登りました。

熊はおこって、松の木にとびつきはじめました。

「どうしたらよいだろう。」

下女は、ほとほと困ってしまいました。

熊は、だんだん高くまで登ってきました。前足が女の足元までとどくほどになりました。

下女は、背負っていた飯びつからシャモジを取りだして、熊の足を力まかせにピシャピシャなぐりつけました。……そうして、長い間、戦っていますと、熊の足のつめのところから、血がにじんできました。

苦しくなった熊は、夕暮れの山の中を、痛む足を引きずりながら逃げていきました。

下女は、やっと、木から下りることができました。日は、すでに、とっぷりと暮れていました。……そこで、今なお、下女と熊が争った松のことを日暮しの松と呼んでいます。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

五和（ごわ）

越木平（こしきだいら）

越木平－賀々沢（かかんざわ）

牧野（まきの）

花島（はなじま）

大時（おおとき）

田河内（たごうち）

田河内（たごうち）

田河内の伝説「たる山の雨ごい」

たる山の雨ごい

たる山のふもとに滝があります。その滝の近くにカメ形に掘られた穴があります。夏日照がつづき水不足になると村人がこの滝にきて、カメ形に掘られた穴を洗い清めればそのしるしがすぐにあらわれ雨が降ると言われています。この雨ごいには原山（わらやま）・越木平（こしきだいら）・海老頭（えびとう）の村人も多くきますが、やはり田河内の農民の雨ごいの方がはるかにそのききめがあるそうです。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

田河内の伝説「朝寝坊の殿様」

朝寝坊の殿様

昔、田河内の殿様と原山（わらやま）の殿様とが、その境を決めることで、長い間争っていましたがなかなか、境がお互いの承知のできるように話し合いがつきません。そこで、とうとう次のような相談がまとまりました。

「いつまでも、こんなことをしていたのではらちがあきません。あした、両方の殿様が朝　早起きをして、お互いにお城から国境（くにざかい）にむかって歩いてきて、出会った所を境とすることに決めましょう。」

ということになりました。

いよいよ翌朝、殿様は、いつもよりはやく起きて、境にむかって歩いて行きました。

一方、田河内の殿様は、うっかりねすぎて目がさめた時は、もう、夜が明けてからだいぶたっていました。びっくりしてとび起きてしたくもそこそこにして、走るように境にむかって歩きはじめました。けれども、一ときもたたないうちに、原山の殿様に出会ってしまいました。そこで約そく通り、そこを境に決めました。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

和泉平（いずみだいら）

和泉平－新宮池（しんぐういけ）

和泉平の伝説「新宮池の大じゃ①」

新宮池の大じゃ①

和泉平の山頂に大きな池があります。そのほとりに新宮（しんぐう）さまのほこらがあります。

毎年七月二十五日にはお祭りがあり、舟屋台（ふねやたい）が池にうかべられて、にぎやかに行われています。

この池にこんないい伝えがあります。

この池は、大むかしは田んぼでしたが、そのむかし、ここの長者（ちょうじゃ）の娘が田んぼのあぜに咲いている花をとろうとしました。ところがその花は、大（だい）じゃが化けていたのでした。大じゃは怒って田んぼをあばれ回り、とうとう田んぼは掘れて、大きな池になってしまいました。そして、大じゃは、その池に住むようになったといわれます。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

和泉平の伝説「新宮池の大じゃ②」

新宮池の大じゃ②

新宮（しんぐう）の池には、

また、こんな伝えもあります。

むかし、この池に、一ぴきの大（だい）じゃが住んでいました。この大じゃはなかなか悪い大じゃで、時々、畑や山を荒し村人を困らせていました。

そこで村人たちが何回も池に来てたのみますが、大じゃは聞き入れてくれません。村人たちは相談して、大（おお）ぜいで焼き石を池に投げ入れてこらしめました。

さすがの大じゃも、とうとうわら山を通ってえい山（やま）の池ににげて行きました。

この新宮の池も、信州の諏訪湖の水が通っているとも伝えられています。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

砂川（いさがわ）

砂川の伝説「かまんどのへび」

かまんどのへび

むかし、砂川のかまんどという所に、へびが住んでいました。ある時、このへびがしもくん沢（さわ）に行きました。

そして、そこで、人々が留守になるとそのへびは機織（はたお）りをしたそうです。

人々は、へびの好きな「ゆうごの葉」に塩を包んでやりました。へびはとてもよろこんだそうです。

しもくん沢では、今も、へびのきらう「ショウガ」を作らないということです。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

領家（りょうけ）－秋葉神社下社

秋葉山の伝説「秋葉の天狗」

秋葉「天狗

むかしから、十一月十六日のお祭りの日には、秋葉山の法印(ほういん)様が、山の四方へ天狗様をお迎えに行くことになっております。お目にかかったところで、たいまつを捨てて、お山に帰ってくるのです。

ところが、お迎えに行って、お目にかかった場所は、ある人はお山から一町、ある人は一里、またある人は五町というように、各々(おのおの)みんなちがいます。それが、お山に帰りつくときは、同じだそうで、たいそう不思議がられています。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

若身（わかみ）

堀之内（ほりのうち）

BUS STOP
秋葉バス
犬居下
INUI SHIMO
バスのりば
遠鉄
堀之内
Horinouchi
道路反対側でお待ちください。

犬居の伝説「堤防をとめた二ひきの竜」

堤防をとめた二ひきの竜

むかし、春野町犬居はよく気田川のこう水（ずい）で田畑があらされて、村人はとてもこまったそうです。

ある年、やはり大水がでて、犬居のてい防が今にもきれそうになりました。村人はひっ死になってこれを防ぎましたが、水かさはますばかりです。そしてあれくるうどろ水は、今にもてい防をやぶって村の中に流れこみそうです。てい防の土の大きなかたまりは、ものすごい音をたててけずりとられていきます。もはや人の力ではどうすることもできません。

村人は心で神にいのりながら、それでも全力をつくして水を防ぎとめました。と、とつ然（ぜん）黒雲がおこり、風にのって二ひきの竜があらわれて、すでにきれようとするてい防をなんなく防ぎとめてくれました。

こうして、二ひきの竜のおかげで犬居の町は田畑や家を流されずにすみました。それ以来、ここの町ではつなんびきといって五月五日の日に竜の形を竹でつくり、ねりあるきます。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

熊切・犬居の伝説「ホッチョばあ」

ホッチョばあ

熊切の青塔（せいとう）の山の中で、むかしから、夕方通るとばかされるという話があります。

ある一人のこびきが夕方うす暗いころ、家にむかってこの山の中を歩いていますと、杉の葉が気味悪くゆすれ合ったと思うと、行く手の道へ一人のばあさんがあらわれました。

手ぬぐいをぶらりとだらしなくさげ、その人のそばまできて、かたに手をかけました。その人はおそろしくなって大声でどなって、二、三歩あとざりをしましたが、その時はもう、その姿は消えていました。

また、熊切の坊山（ぼうやま）と犬居の古奈良安（こならやす）とはむかい合っています。古奈良安で祭りやお祝をすると坊山でもやるように物音が聞（きこ）えたり、夜あかりが見えたりするそうです。それはたぶん、青塔のよう怪がごうをしてみせるのではないかと言っています。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

豊岡（とよおか）

勝坂（かっさか）

勝坂の伝説「灰なわ」

灰なわ

勝坂の北の方に、「灰なわ」という所があります。

むかしこの山に、たいへん親孝行なむすこが住んでいました。そのころの風習では、年をとって働くことができなくなった老人は、奥山へ捨てることになっていました。しかしこのむすこだけは、年とった母をどうしても捨てることができませんでした。それで、こっそり家の中にとめて、孝養（こうよう）をつくしておりました。

そのころ、たまたま領主様が、「灰なわ」を持ってくるように命じました。灰で作ったなわなんて、考えてみても無理なことですね。村人たちは、全く困ってしまいました。このむすこも、どうすることもできませんでした。そこで、日ごろ尊敬している老いた母にそのことを話しました。

母は、しばらく考えていましたが、

「それは、よくたたいたわらで堅くなわを作って、それを焼いてごらん。」

と教えてくれました。

そのむすこは、母の言う通りになわを作って、領主にさし上げました。領主はとてもよろこんで、たくさんのごほうびをくださいました。その上、

「どうしてこの灰なわを作る方法を知ったのか。」

ときかれました。そこで、そのむすこは、一部始終をくわしく領主に申し上げました。

領主もいまさらながら老人の尊さを感じて、その後は、老人を捨てる風習をやめるようにふれを出しました。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

杉－瀬居（せい）

杉－平城（ひらじょう）

杉－高杉（たかすぎ）

杉ー門島（かどしま）

杉ー居寄（いより）

杉－気田子（けたご）

川上－大村（おおむら）

川上－麦島（むぎしま）

川上の伝説「なべ石の伝説」

なべ石の伝説

川上の村から川をさかっていきますと、約二里位上流になべの形をした大きな石があります。

むかし、この近くの川に毒へびが住んでいて、牛や馬に害を与えるばかりか、人にまでも害を加え村人からおそれられていました。

ところがある時、天地がなりひびいて大きな石が落ちてきてこの毒へびを打ちころしてしまいました。村人は、この毒へびのたたりを心配して、その骨をほこらに入れておまつりしました。

この大きな石がなべ石といわれる石で、おもてがくぼんでいて、いつも雨水をためています。これは毒へびの精がこの石にのりうつっていて、毒へびがのどがかわいたときにのむ水ではないかといわれています。

このなべ石の水をくみだすと大じゃの精は、たちまち雲をおこし、雨を呼ぶといわれています。だから夏に、日照りがつづきますと、大じゃ(だい)をまつってあるお堂におまいりしてからこの雨水をくみだして雨ごいをするそうです。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

宮川の伝説「城山小僧」

城山小僧（じょうやまこぞう）

今から二十年ほど前、平木（ひらき）の村で四、五才の幼児が子守と遊んでいるうちに、いつのまにか、姿が見えなくなりました。村中、おおさわぎをしてさがしまわったあげく、その日の夕方になって、ようやく里から十四町ほど登りつめた城山（じょうやま）の草むらの中に、傷一つおわず無事に発見されました。おとなでも行けないところですから、これはきっと城山小僧の仕わざにちがいないと、そのころたいへんな評判でした。

昔、この城山の木を切ることになって、七人のきこりが山にはいりました。ところが、七人では都合が悪いというので、人をもう一人さがしましたが、なかなか見つかりません。

そこで、相談して、一つのわら人形を作り食べることからねることまで、自分たちと同じようにふるまって、その日その日を過ごしていました。やがて、仕事も終えたので一同は、わら人形を残してそのまま引きあげてしまいました。ところが、七人の人たちが同じ人間としてふるまった人形にたましいが移って、ときどき、里へ出て来てはわざをするようになり、今でも土地の人は、これを城山小僧と呼んでおそれています。

また、ある伝えによりますと、「城山の峠の草むらに、子どもがうつぶしてひん死の状態にあるのを見つけ出して、家につれて帰りかいほうしましたが、かいなくとうとう死にました。」と書かれてあります。そのあとに、城山小僧を見た人があるといわれますが、白髪の老人だったということです。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

植田（うえった）の伝説「桜ぶちの大じゃ」

桜ぶちの大（だい）じゃ

春野町植田（うえった）の村のはずれに深いふちがあります。この岩ぺきに大じゃのすむどうくつがあります。このあなの底は、小笠郡の桜ケ池に通じるという伝えから「桜ぶち」といわれています。

野尻（じり）のある家に美しい娘がおりました。ところが、毎夜、若い男がかよって来ます。

そのうちに母にしられて、その後はげん重に戸じまりをしておきますが、その男は音もなくきて風のようにかえっていきます。母も不思ぎに思って、娘にたずねてみました。娘は、「そのひとの手足は冷たく、すわった所はしっとりとしめっている。」

と答えました。そこで母はびっくりして、その正体をみとどけるようにいいつけて、はりを男の頭にさして、そのはりに糸をつないでおくことを教えました。

夜になって男がきましたので、帰りぎわに母の教えた通りに頭にはりをつきさしました。男はなまぐさいなんともいえぬにおいを残して、ものすごい音をたててでてにげました。

よく朝、糸をたぐってゆくと、桜ぶちにまっ赤な血にそまって、大じゃが死んでおりました。

今でも気田川の流れが、そのどうくつを流れるときは、長者の家は栄えるし、流れが向こうぎしにいくとおとろえるといわれています。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

石切（いしきり）の伝説「那須与一の屋敷跡」

那須与一（なすのよいち）の屋敷跡

石切堺田京（いしきりさかいたきょう）に那須与一の屋敷跡といわれている所があります。

むかし、この地方の先祖に、入手清左衛門（いりてせいざえもん）、入手小五郎（いりてこごろう）という兄弟がありました。

兄の清左衛門は、与一丸と呼ばれていたそうです。そこで、源平合戦で有名な那須与一と同一人物とみなされ、その屋敷のあった所を那須与一の屋敷跡というそうです。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

小俣京丸（おまたきょうまる）の伝説「京丸ぼたんの伝説」

京丸ぼたんの伝説

昔、いつのころか、京丸の里に気品のある若い旅人が迷いこんでまいりました。里長（さとおさ）の家にやっかいになっているうちに、その家のぼたん姫という気だての優しい、美しい娘さんと、とても親しくなりました。

しかし、ここの里のきまりでは、他国の見知らぬ旅人と親しくすることは、いろいろな理由で許されません。そのうちに、この二人の姿はいつのまにか京丸から見られなくなりました。あとのうわさでは、気田川に二人で身を投げたとも言われています。

それ以来、二人の命日が近づくと、ぼたんの花びらが散って、からともなく流れて、川の瀬に浮かぶのを村人が見うけたということです。

引用：ふるさと春野の伝説（昭和60年 春野町教育委員会発行）

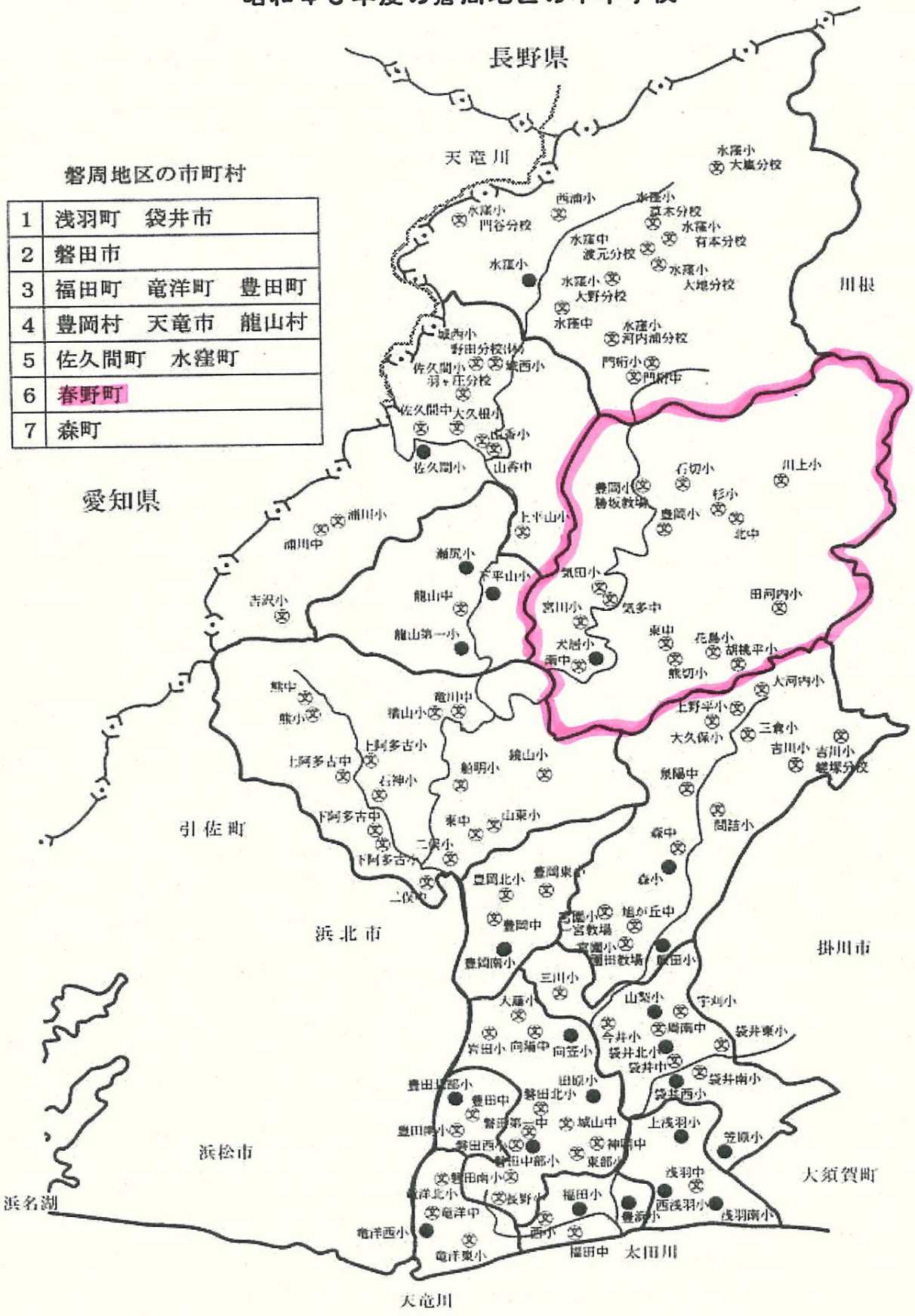
【幻の花・京丸ぼたん】

ふるさと春野には数多い伝説が今でも語り伝えられています。が、京丸牡丹伝説は最も美しい伝えです。

むかし、いつごろよりか秘境京丸谷の中腹に六十年に一度傘大の白い牡丹の花が咲き、その幹は二かかえも三かかえもあると伝えられています。

この谷は大変険しくて人の近よれない場所で、その花をみとどけた人は、かってないので幻しの花なぞといわれます。

昭和４３年度の磐周地区の小中学校



「磐周教育の三十八年」（平 19）より

●：昭和１６年３月以前に校歌ができた学校

磐周地区小・中学校旧校歌（平成23年 鵜飼和吉 発行）より

気田小学校（けたしょうがっこう）

気田小学校

校歌

一　西に秋葉の　霊峰そ┗え
　気田川清らに　流るるほとり
　緑の丘の上　学舎立てり

二　山幸川幸　豊かなめぐみ
　栄える春野を　になうはわれら
　輝く希望に　心はおどる

三　朝に夕に　手をとり学┗
　すなおに明るく　正しく強く
　日本の子┐よ　われらは進む

令和２年度で創立147年を迎える歴史ある小学校です。時代の流れに伴う小学校の統合により、気田地区、杉・川上地区、熊切地区と学区がどんどん広がっていきました。小学校ホームページのブログの更新がすさまじく、先生方の熱意が強く感じられます。

学校生活の様子が非常によくわかる、地域に開かれた小学校です。

犬居小学校（いぬいしょうがっこう）

犬居小学校

校歌

一　水清らかな　気田川を
　見下す丘の　学校に
　みんな仲よく　学L ます
　固くつなぐ手　おどる胸

二　川原に霜の　白い朝
　グランドの土　燃える昼
　みんな元気に　鍛えます
　丈夫な体　強い足

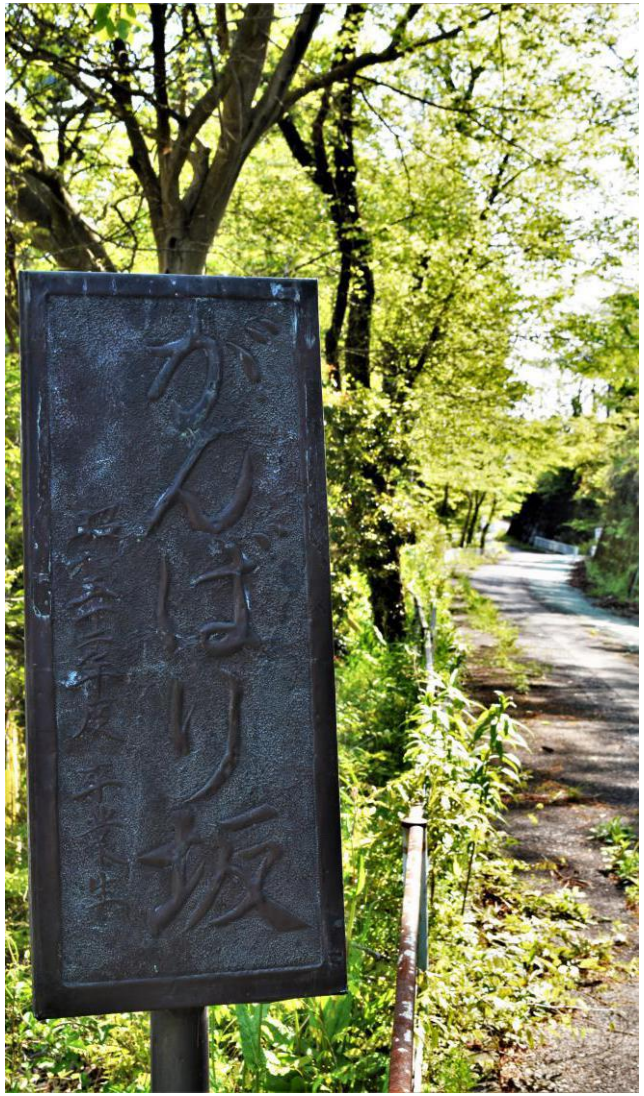
三　高くそL たつ　秋葉山
　めぐらす山の　木の緑
　力あふれて　励みます
　輝く瞳　結 T口

四　犬居の町を　拓かれた
　大きな力　受け継いで
　新しい世を　興します
　ふくらむ望み　あおぐ空

歴史ある瑞雲院のふもとから坂を上ってたどり着く、犬居地区の小学校です。明治７年に創設された当時は、瑞雲寺境内の中に学校があったそうです。気田小学校と同じくホームページが整備されており、毎日更新されるブログは要注目です。

熊切小学校（くまきりしょうがっこう）

熊切小学校



がんばり坂

校歌

一　霧が晴れたよ　希望の朝だ
小高い丘の　学L舎で
いざ学┣うよ　楽しく仲よく
窓も明るい　熊切小学校

二　仰ぐ緑の　高塚山に
元気な声を　こだまして
いざ鍛えよ　素直に真面目に
常に誇りの　熊切小学校

三　清い流れの　熊切川は
世ﾛｯｰの海へ　続いている
いざ進もうよ　くじけずたゆまず
未来輝く　熊切小学校

私が６年間通っていた小学校です。学区が広く、私は当時運行していた秋葉バスを利用して50分近くかけて通っていました。学校目前に立ちはだかる「がんばり坂」はなかなかの急な坂で、長距離走の時に苦しめられた記憶がよみがえります。平成27年３月に閉校し、同年４月に気田小学校と統合しました。

北小学校（きたしょうがっこう）

北小学校

校歌

一　┬くら山の子　元気な子
　山のみどりと　杉川の
　清き流れに　いだかれて
　みんななかよく　学┴ます

二　天をゆ┴さす　若杉の
　めぐる丘辺の　学舎に
　気迫あふれて　たくましい
　丈夫な体　鍛えます

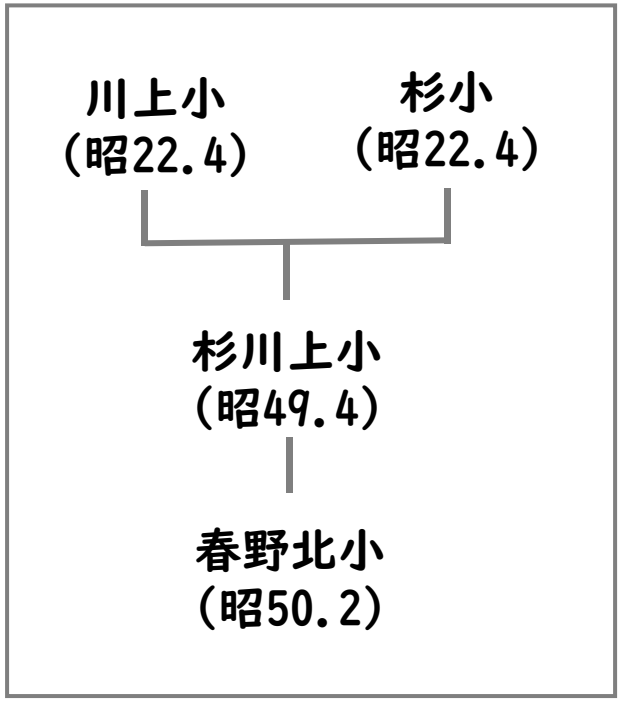
三　そ┴つ┬山の　源流に
　韻も貴に　湧く泉
　自然の訓　聴き求めて
　心正しく　励みます

四　恵み豊かな　ふるさとの
　輝く歴史　うけついで
　理想は高く　力ある
　世紀の夢を　育てます

杉・川上地区の小学校です。平成25年３月に閉校し、同年４月に気田小学校と統合しました。春野町の小学生は高学年になると、町内の４小学校が会場を持ち回りで行う水泳大会に参加することになっていたのですが、北小学校のプールがものすごく冷たかったのを覚えています。また、当時、北小学校ではヤギが飼育されていたと記憶しています。

川上小学校（かわかみしょうがっこう）

川上小学校



校歌　※　杉小学校

一　晴れわたりゆく　朝霧は
　みんなの未来　あしたのうた
　なつかしい　秋葉の山よ
　谷間のゆりよ
　みどりの窓辺に　よい子は学ㄒ
　杉　杉　ゆかりの小学校

二　かがやきわたる　青空は
　みんなのねがい　平和のうた
　森かげの　杉の川よ
　ひかりのあゆよ
　からだをきたえて　若木はのㄴる
　杉　杉　ほまれの小学校

杉地区と川上地区にはそれぞれ、杉小学校と川上小学校がありましたが、昭和49年に統合し、杉川上小学校となり、さらに翌年に校名を北小学校に変更しました。川上小学校、杉川上小学校の校歌は「なかった」と地元の人がおっしゃっていたそうです。

川上小学校、杉小学校の校舎はすでになく、川上小学校に渡る橋の手前に看板だけが残っています。

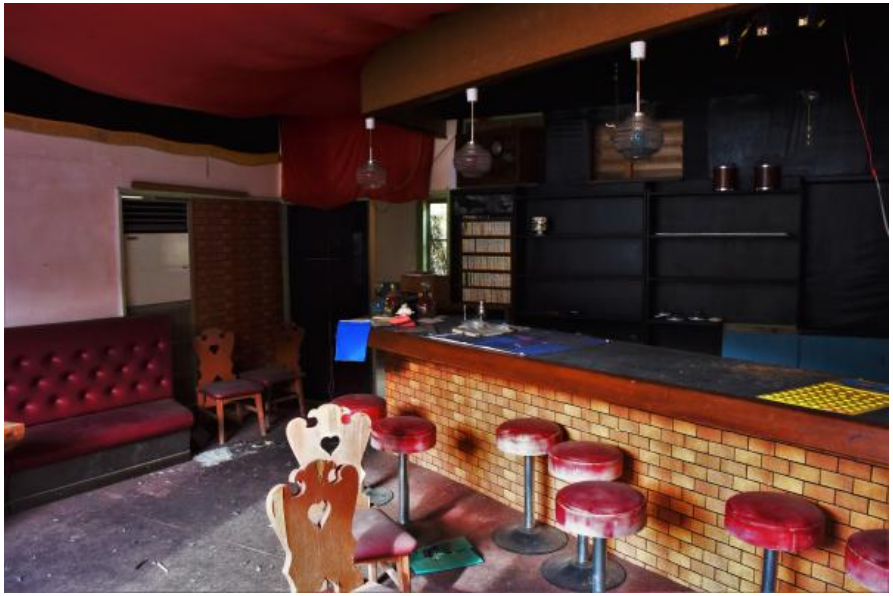
田河内小学校（たごうちしょうがっこう）

田河内小学校

私の地元である田河内集落にあった小学校です。昭和44年に閉校してからは、しばらく民宿兼公民館として使用されてきました。私が幼い頃は、まだ祇園祭りの時などに集会所として使われていた記憶があります。今も校舎は残っていますが、使用はされておらず、公民館の建物も別に建てられています。

田河内集落に小学校が成立するほどの子供が住んでいたとは、今となっては想像がつきません。廃校を眺めながら、その集落の自分が知らないかつての賑わいに思いをはせる時には、何とも言い難い感情になりますが、それもたまには良いと思っています。

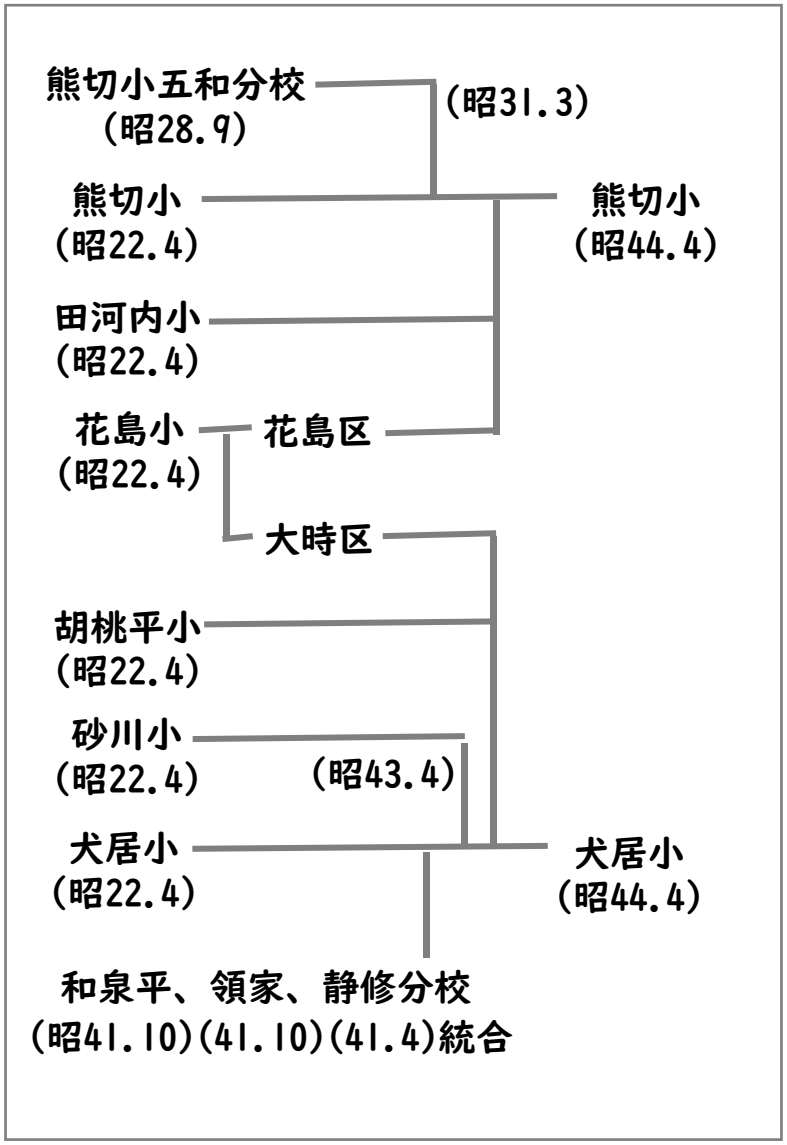
田河内小学校校舎



民宿として使われていた名残

花島小学校（はなじましょうがっこう）

花島小学校



校歌

一　春埜の山の　峯つづき
緑の園に　咲きほこる
人の心の　香ぐわしく
伝統かがやく　花島の
ああ　学舎は　明けていく

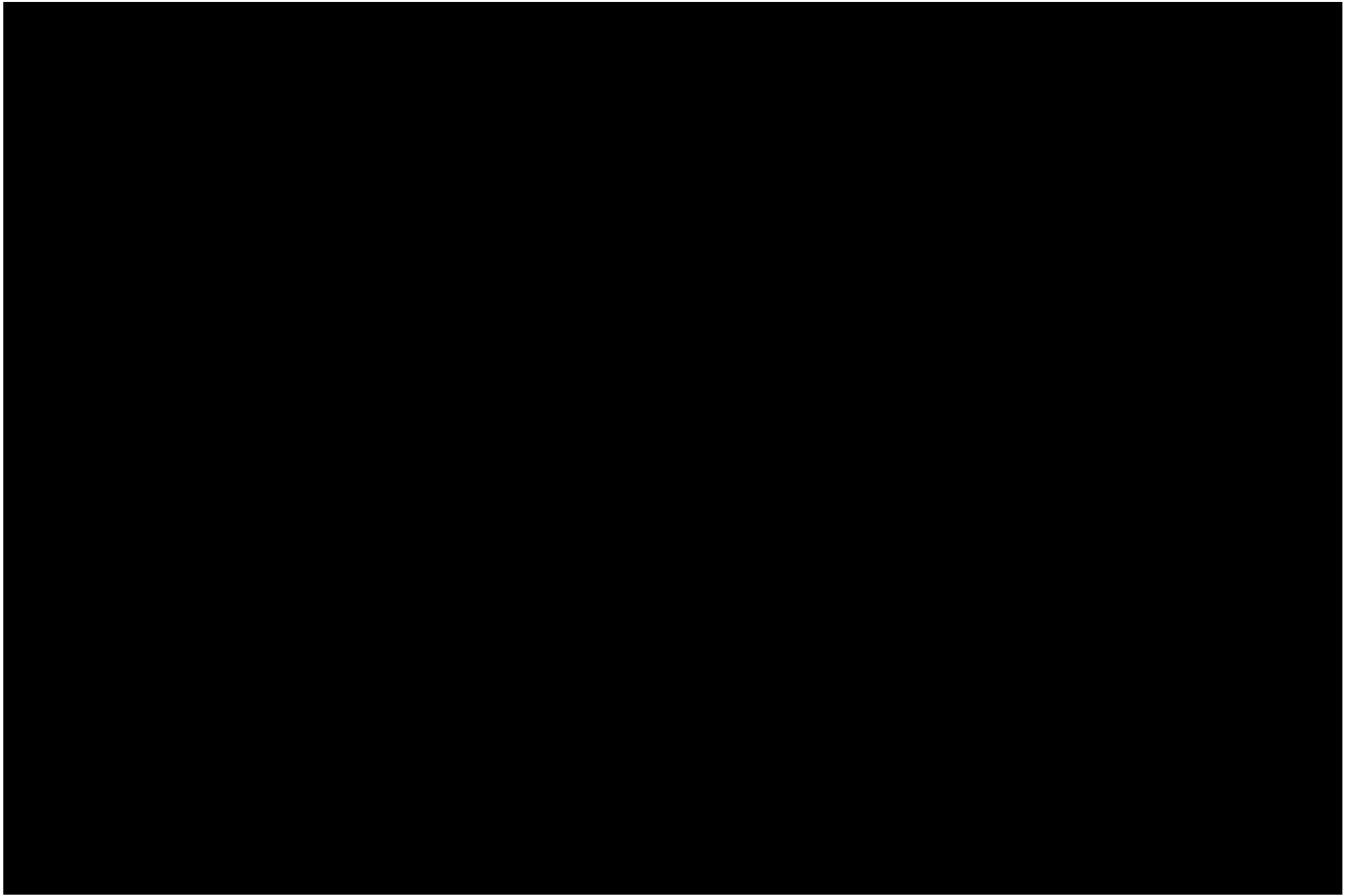
二　民主の風に　ゆあみして
君の理想を　吾れもまた
主義としきょうも　学レゆく
友いたわりつ　和やかに
ああ　学舎の　鐘はなる

三　平和と文化の　夢のせて
永カ行に朽ちざる　礎を
われらが築かん　平和郷
この一筆も　この業も
ああ　胸はなる　高らかに

昭和45年に閉校となった花島地区の小学校。閉校当時の児童数は47、8名ほどで、その半数ほどが熊切小、半数ほどが犬居小に別れていったとのことです。

しばらくは製茶工場として使われていたそうですが、今は校舎も取り壊され、グラウンドと門柱だけがその面影を残しています。

勝坂小学校（かっさかしょうがっこう）



勝坂小学校

石畳の通学路

校歌　※一番のみ

一　千古の緑　赤石の
懐ろ深く　抱かれて
大きな望み　はてしなく
やがて飛び立つ　ひな鳥よ
かたく手と手を　たずさえて
ああああー勝坂　勝坂小学校

昭和43年に閉校となった、勝坂地区の小学校です。閉校後は、豊岡小学校と統合しました。さらに豊岡小学校は昭和55年に気田小学校と統合しています。

春野町と水窪町をつなぐ県道水窪森線を通っていると、川の対岸に見えてくる存在感のあるピンク色の校舎が勝坂小学校です。通学路と思われる小道は石畳になっていて、とても趣があります。ドラマの撮影に使われたこともあるようです。

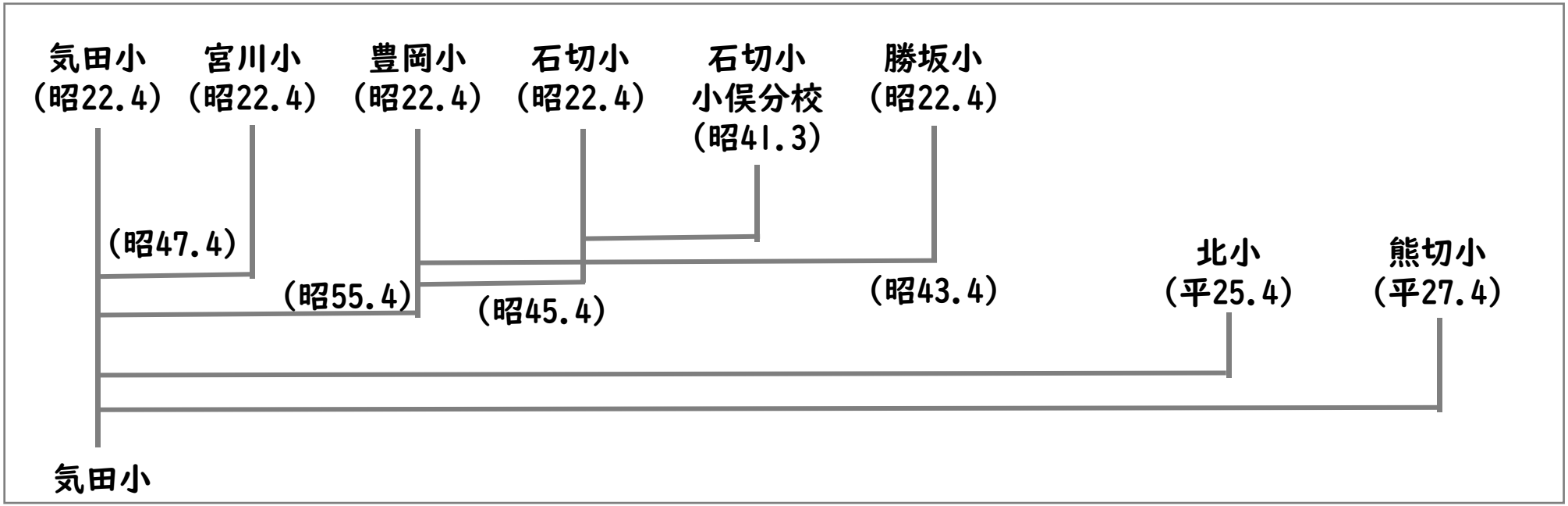
石切小学校（いしきりしょうがっこう）

石切小学校

昭和45年に閉校となり、豊岡小学校と統合しました。
豊岡小学校は昭和55年に気田小学校に統合されています。
春野町でも指折りの奥地にある小学校で、集落自体も数軒を残すのみとなりました。木造の平屋建ての校舎は老朽化が進んでいるものの、今もその形を残しています。

校歌　※一番のみ

一　赤石の峰　うち仰ぐ
石切川の　西の岸
古き歴史を　たたえつつ
僕らはよい夢　作るのだ
がんL れ　石切小学校



天竜高校春野校舎（てんりゅうこうこう）

天竜高校春野校舎（旧春野高校）

天竜高校校歌

一　天に竜在り　地に竜在り
昇る朝陽に照らされ仰ぐ
我らも伸L ゆく若杉なり
山百合の咲く　この路から
臨むは(カナ)州　太平洋
龍神坐すこの土地で
力を合わせて歩みゆく
描いた夢も竜なれL
地域の竜と成り(プッカ)かむ
明日への竜と成り(プッカ)かむ

二　天に竜在り　地に竜在り
水を讃えて大地に生きる
我らも希望の楠なりや
ひまわりの咲くこの路から
臨むは　天地龍頭なり
豊かな風吹くこの土地で
支えに感謝し進み(プッカ)く
こころざしこそ竜なれL
社会の竜と成り(プッカ)かむ
世(ユロー)の竜と成り(プッカ)かむ

春野高校校歌　一番抜粋

一　天高くそL え立つ
赤石の山…の
いく重にも
かさなっている
山並みの頂きは
はるか昔からの
姿を残し
その上空には白い雲が
鮮やかに輝いている
ああこの場所で
鍛えている我…は
力強い精神を
養っている

春野高等学校は平成26年３月をもって閉校。
天竜林業高等学校、二俣高等学校、春野高等学校の３校を再編するかたちで、同年４月１日より天竜高等学校が開校しました。

南中学校（みなみちゅうがっこう）

南中学校

校歌

一　秋葉山並みどりに匂い
気田の川辺に若草もえて
みはるかすもの(ラド)清らなる
ああこの丘に立てる学園
南中学

二　その名もゆかし光が丘に
理想の自主をかざして立て
つどいよる友なさけあふれて
ああこの丘に立てる学園
南中学

三　谷間の百合の香に立つ如く
おのずからなるすがしさもちて
強く正しく足並みそろえ
ああこの丘に立てる学園
南中学

四　朝ぎりこむる山脈みそらを
仰ぐ瞳に希望はもえて
郷土の文化ここにあれよと
ああこの丘に立てる学園
南中学

犬居地区の生徒が通う中学校でした。平成17年３月に閉校し、同年４月に気多中、東中と統合し春野中学校となりました。

中学校内の庭には、犬居地区の出身で宝塚レビューの王様と言われる白井鐵造氏が作詞した「すみれの花咲く頃」の歌碑があります。

春野東中学校（はるのひがしちゅうがっこう）

春野東中学校

校歌

一　青杉の　山の狭間に
激ちゆく　熊切の川
清らなる　流れぞ永久に
若人の　心の象徴
たゆみなき　われらが理想
いざ友よ　心合わせて
もろともに　務め励まん

二　群山の連なる中に
そそり立つ　高塚の嶺
朝に日に　ふりさけ見つつ
友情と　愛と努力の
いや高き　われらが使命
いざ友よ　力合わせて
もろともに　務め励まん

三　野に山に　幸はふめくみ
かぐわしき　茶の香漂い
豊かなる　実りは満ちて
いつくしき　われらが里ぞ
学L舎も　かくて栄えん
いざ友よ　手に手を取りて
ひたむきに　務め励まん

熊切地区の生徒が通う中学校でした。平成17年３月に閉校し、同年４月に気多中、南中と統合し春野中学校となりました。私は中学１年生の１年間、ここに通いました。

登下校時の校舎一礼や、毎朝の朝礼での五心唱和（「はい」という素直な心、「すみません」という反省の心、「おかげさま」という謙虚な心、「私がします」という奉仕の心、「ありがとう」という感謝の心）などの独自の文化が心に残っています。

春野中学校（はるのちゅうがっこう）

春野中学校

校歌

一　若き緑に　風光る
すみれの道の　清しさよ
初志をかざして　青き空
峰越ゆるまで　高らかに
新しい歌　響かせよう
春野中学　学Lゆく

二　たゆまぬ流れ　清らかに
若鮎の群れ　輝ける
一路を指して　迷いなく
心磨きて　身を鍛え
友と誓いし　夢を追う
春野中学　誇りゆく

三　豊かな自然に　育つ郷
満つる笑顔の　健やかさ
古きをたずね　今を知る
黎明の陽　真直ぐに
未来の道を　つなぐだろう
春野中学　進みゆく

平成17年に、気多中学校、南中学校、東中学校の３校が統合して、春野中学校となりました。私は中学校２年生から２年間、ここに通いました。

異なる地区の生徒と手探りで新しい学校を作り上げていく、特殊な環境ではありましたが、他の地域ではできない貴重な体験ができたと思っています。統合してからの２年間は、統合前の３つのジャージと新しいジャージの４つのジャージ姿が入り混じっていて、教室が華やかだった記憶があります。

気多中学校

校歌

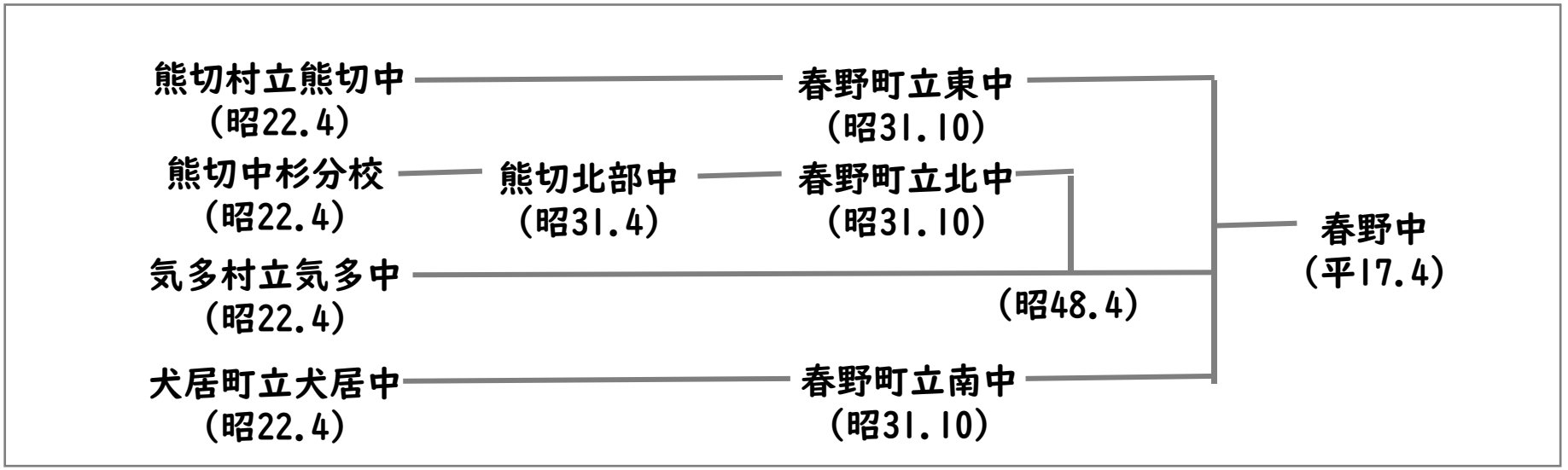
一　青垣の　山をめぐらし
真玉なし　水澄み流る
森林の　樹…は苔むし
淵に瀬に　鮎群れ躍る
ああ気多　我等が中学

二　京丸に　朝霧晴れ
平和の気　天地に満つ
秋葉には　夕雲におう
おおらかに　心育てん
しゃくなげの　花咲くたに

三　気多川は　昼夜をおかず
もみじ葉の　色照る峯
とことわに　流れてやまず
ああ気多　我等が中学
おおわたを　こころざしつつ

天然の美　よもにみなぎる
ゆわがねを　うがちて進む
うるわしき　文化を建てん
ああ気多　我等が中学
希望の火　胸に燃えたつ

高カ行の　理想を追わん



春野北中学校

春野北中学校　校歌

一　みどりに匂う　山…を
めぐりて清き　杉川の
岸辺の丘の　学舎は
花咲く春の　光満つ
　その名春野北中学

二　五嶺に霧の　はれゆけ└
見よ青雲は　輝きて
高きを仰ぐ　若人の
自主の旗風　音さやか
　その名春野北中学

三　不屈の気生　鍛えつつ
よき師よき友　集いより
心一つに　通うとき
松枝渡る　風清し
　その名春野北中学

四　郷土の歴史　うけつぎて
若き生命を　ひとすじに
山の子われら　新しき
世紀の扉　ひらく┬し
　その名春野北中学

杉・川上地区の生徒が通う中学校でした。昭和48年に気多中学校と統合しました。気多中学校と統合した後の北中学校の跡地は、杉小学校と川上小学校が統合してできた杉川上小学校となりました。杉川上小学校は、昭和50年に春野北小学校と校名を変え、さらに平成25年に気田小学校と統合しましたが、校舎は今でもその形を残しています。

豊岡小学校、宮川小学校

豊(ゼクル)小学校校歌

一　山のみどりに　囲まれた
　　白い校舎の高い(サイクル)根
　　気田の流れを　見おろして
　　新しい世の　朝がある

二　光すずしい　窓の中
　　真理求めて　はげむ子の
　　強く正しく　美しく
　　みずからひらく
　　みちがある

三　じょう┬なからだ
　　かがやく目
　　力あふれて　かける子の
　　直ぐ明るく　たくましく
　　伸┗ゆく者の　歌がある

四　昔のかたの　きずかれた
　　町のほこりを　受けついで
　　あしたをになう　豊(ゼクル)の
　　若いいのちの　夢がある

宮川小学校校歌

一　ながれも清い　気田川の
　　めぐむ光の　その歴史
　　ほこるたのしい　まな┗やに
　　われらよろこ┗　いま歌おう

二　秋葉の杉の　日にの┗て
　　みねの白雲　よ┬ところ
　　強く明かるく　むず┬手に
　　あすの力を　いまみがこう

三　のぞみの風の　は┗たきに
　　心ひとつの　宮川の
　　『えかがやく　ほまれを┗
　　胸にかざして　いま進もう
　　ああ　われら
　　たたえよう　宮川小学校